

## 出土楽器が語る音の世界—骨笛—

出土楽器で最も時代が古いのは、骨で作られたものである。世界に眼をやれば、ウクライナのメジン遺跡では、マンモスの骨製楽器が一式出土している。それはヨーロッパ東部にも氷河が拡大したマドレーヌ期（約2万年前、後期旧石器時代最後の文化）のものだそう（郡司すみ『世界の音—楽器の歴史と文化』講談社学術文庫、2022年24頁）。マンモスの骨を叩いて音を出し、祭祀に使ったものと推測されている。

では、古代中国にはどのような楽器があったのか。文献資料が豊富である中国では、それに基づいて考察することになるが、それ以前の時代となると、やはり出土文物によって、その実態に迫ることになる。中国で最も古い出土楽器といえば、「骨笛」が真っ先に挙げられよう。

中国では随所で骨笛が出土しているが、一番注目されているのは、河南省の舞陽賈湖遺跡出土の25本の骨笛である。それは鶴の尺骨（翼の前腕部の骨）で作られているそう。指で押さえるための孔の数が5孔・6孔・7孔・8孔とまちまちなようだが、最も多いのは下図にある7孔のものである（劉東昇等編・明木茂夫監修・翻訳『中国音楽史図鑑』科学出版社、東京国書刊行会、2016年）。また、賈湖遺跡は新石器時代早期のもので、いまから9000年～7800年まえの、比較的大きな規模であるが、これだけ保存状態がよく、時代が明確にわかるものは珍しく、中国でも発掘・研究が進められている。

その骨笛の研究状況は、中国の鄭州大学音楽学院長で、音楽考古研究院院長でもある王子初氏の「賈湖骨笛の“七声”研究

与東亜両河の音楽文明」（『中国音楽学』2022年第3期）に詳しく記されている。賈湖遺跡の骨笛の大々



的な調査が初めて行われたのは、1987年11月のことであり、その当時は中国音楽研究の大家である黄翔鵬氏を中心としたメンバーが、ストロボ撮影を初めとして、音高を確かめるために直接吹奏して報告書を作成したのであった。それにしても、9000年まえのものを直接吹奏するとは、なんと大胆なことであつたか、劣化を早めてしまうことは無かったのかと驚かされたりもする。当然その報告は、中国の権威ある学術雑誌『文物』に載せられた。けれども、1977年に出土した大型楽器編鐘ほどは注目されてこなかった。そしていま、第1回調査から35年も経過して、王子初氏が骨笛について論じたことは、実はすぐれて政治的な意味を含んでいる。音楽と政治が密接に関わる中国ならではの思わせられる。

先にも述べたように骨でできた楽器であれば、世界ではもっと古い時代のものが多く出土している。ここでは、「7孔」が重要ポイントとなる。それがもし中国の「宮・商・角・徴・羽・変徴・変宮」の7音階と符合していれば、「中華文明は世界中でも最も早く7音階の知識を持っていた」と言えるわけである。論文のなかで王子初氏は、習近平総書記が中国共産党中央政治局第39回学習会の折に、中華文明の長い歴史を強調し、それ

が全世界の華人の精神的な連帯を導くと話したことに言及している。7つの孔がただ開けられたものなのか、7音階の知識をもったうえでわざわざ穿たれたものであるのか、9000年前の音階知識の有無が、現在の中華文明の世界における位置づけを左右することになってしまったのである。

それゆえに2022年の時点になって王子初氏がこれについての論稿を出したのであった。そこには、「賈湖の人が7音階を理解していたかどうかは、まだ明確には判断できない」との見解が示されており、音楽考古の第一人者として、中華文明を世界最古に祭り上げたい政治家による安易な利用に抗うようである。そして、これからの研究によって「7音階」がすでに存在したかどうかを明確にしなければならぬと、述べている。さて、文字による文献資料の無い時代のことになると、出土した骨笛を吹いてみるだけでなく、さらにじっくりと調べる必要がある。そこで頼りになるのが、3DプリンターやCTスキャンという現代文明の利器である。すでに「賈湖骨笛の精確復元研究」（『中国音楽学』2012年第2期）という論稿があり、中国科学院の方曉陽氏をはじめ何人もが携わった研究において、現代に復元された骨笛による音高の調査が行われていた。それが決定打にならなかったことは、先の王子初氏の論稿によっても明らかである。なぜ外観も内側もまったく同じ復元笛によってもわからないのか。まず復元したのは樹脂製であり、この素材の違いが大きいらしい。さらに大きな違いは吹く人の息の入れようにあるという。笛は息の入れようによって同じ孔を手で押さえても出る音が違う。多くの人が吹いて平均を出すよりほかなさそうであるが、ここから7音階を導き出すのは、至難の業であろう。

筆者が不思議に思うのは、これがなぜ鶴の骨で作られているかということである。このことについては何も解説がなされていない。日本語でも「鶴の一声」などと言うが、古来鶴は鳥のなかでもその鳴き声が印象的であつたらしく、「夜半ばに及びて鶴唳き、晨將に旦けんとして雞鳴く」（『論衡』卷一五變動篇）と、朝に鳴く鶏と対して語られていたり、「鳥啼きて永夕に倦み、鶴鳴きて別離を傷む」（『唐文粹』卷一七上 陳子昂「鴛鴦篇」）と、鶴の鳴き声が別離の悲しみに満ちていると詠じられたりしている。鶴は人里近くにおり、その声は、人の感情をゆさぶるものだったのであろう。また、以前に述べたことがある『韓非子』十過に、春秋時代の楽人師曠が琴を一度奏すると玄鶴が集まり、再度奏すると整列し、三度奏すると首をのばして鳴き、翼をひろげて舞ったと記載されている。春秋時代には鶴は人の奏でる素晴らしい音に応じる鳥であるとされていた。人と動物が感情のレベルでかなり通じ合っていたのであろうか。鶴の骨で笛が作られた目的は想像するしかない。鶴を呼び集めるため、あるいは祭祀のためと言われることもある。先史人は、なぜ鶴の骨で笛を作ったのか、それは何のためだったのか。音楽考古の研究はどのようにそれを突き止めるのか、今後も注目したい。それが現代の政治家への忖度でなされることがないよう期待しながら。